

特集 凋落著しい「3大監査法人」の内情

平成23年9月1日発行 第55巻第10号 毎月1回1日発行  
昭和32年3月28日 第3種郵便物認可

# ZAITEN

2011 SEPTEMBER

9

ザイテン

日揮 絶好調の陰に「重久グループ代表」リスク

## 迷走する「公認会計士」

### 企業とNHK

公共放送で「宣伝」してもらう方法



JAL 倒産しても「ボーナスが貰える」会社  
ソニーで潜行する「クーデター極秘計画」  
ニチイ学館「価格破壊」に晒される介護のガリバー



特集

# 迷走する「公認会計士」

3万人公認会計士「粗製乱造」の重い代償  
新日本・あずさ・トーマツ凋落「3大監査法人」の内情  
IFRS強制適用を急ぐな！オールジャパンの議論を  
監査なし「非上場大企業」500社の危ういコンプライアンス  
企業会計担当者が語る「監査法人のバカヤロー」

14  
18  
22  
24  
26

企業

日揮 絶好調の陰に「重久グループ代表」リスク  
ソニーで潜行する「クーデター極秘計画」  
三越伊勢丹・三越意気消沈で高まる「協議離婚」  
中国に食われた川崎重工・JR東日本の「新幹線技術」  
産業界に輝く「勝俣兄弟ブランド」の蹉跌  
ZAITEN「アナリストレポート」  
スズキ工場移転計画に株価が反応しない「3つの要因」  
ブリヂストン 世界一であり続けるためにタイヤ業界を変革せよ

28  
36  
34  
32  
40  
44  
54

職場

「企業ミシユラン」有名企業の職場環境・給料  
JAL 倒産しても「ボーナスが貰える」会社

128



岡野流処世術とは  
(岡野雅行氏)



民間会長で公共放送も民放化？  
(松本正之・NHK会長)



喜寿を越えたカリスマ  
(重久吉弘・日揮グループ代表)

## 連載

- 巻頭 あの人のお宅  
JAL  
大西 賢 社長
- 94 人気ゴルフ場「辛口スコア」  
ファイブエイトゴルフクラブ
- 57 横田由美子が  
聞いた見た永田町噂話
- 52 グローバル企業名鑑  
グレンコア・インターナショナル  
～資源界の「ゴールドマン・サックス」～
- 92 ブックレビュー
- 106 高橋利行の永田町コラム  
政権交代する気がない谷垣自民党
- 随所 プリーズ、虫めがね!
- 134 プリーズ、携帯電話!

## 介護

### ニチイ学館

「価格破壊」に晒される介護のガリバー…… 46

## 主張

生き残るためにはもつと遊べ、義理人情を大事にしろ ◆ 岡野工業代表社員 岡野雅行…… 96

## report Z

情報誌『選択』株主総会に轟くオーナーの奇声…… 100  
経済事件強化を打ち出した特捜部が挑む「電機業界」の闇…… 102  
CIA代理人の死で明らかにされた仕手筋「加藤豊」の近況…… 104

「みなさまのNHK」で流される、疑似CM徹底検証…… 82  
膨張続ける「NHK1兆円コングロマリット」の正体…… 86  
「ためしてガッテン」おばちゃんを走らせる催眠効果…… 85  
「プロジェクトX」元プロデューサーに聞く NHKに「自社」を宣伝してもらう方法…… 78  
「1番組組10億円」の価値をもつNHKの宣伝効果…… 74

## 特集2

### 企業とNHK 「最強の広告媒体」

- 118 世界の中の日本——ブラジル編  
114 全国制覇した「やすらぎ」の魅力

## 情報フラッシュ

- 58 厳しさ続く消費者物価

## 企業トピックス

- 108 中部電力  
109 セコム  
110 関西電力  
111 三井化学/イズミヤ  
112 杉田エース/新日本空調

©財界展望新社 2011

写真提供

日刊工業新聞社・共同通信社・PANA 通信社  
時事通信社・毎日新聞社・朝日新聞社

## 連載

90



佐高信「今月の呆れた政治家」  
石原伸晃

73

友里征耶の  
ホテルレストラン勝手格付け  
シェラトン都ホテル東京



# 企業会計担当者が語る 「監査法人のバカヤロー」

企業の健全性を図る指標のひとつに挙げられる財務。監査の場ではその判断を公認会計士が握っているのだが、企業の担当者からすれば「勉強」はできても、人間としては未成熟だと怒声が聞こえてくる。

——日本マネジメント総合研究所理事長 戸村智憲——

「会計」のプロ集団であるはずの監査法人が赤字を出し烏合の衆と揶揄されている。その原因のひとつに、現場目線なき横柄な会計士の存在が挙げられるが、監査を託す側の企業担当者の声に耳を傾けると、もはや監査を任せておけないとの憤りの声が聞こえてくる。

おだてれば木に登る  
知能指数の高いバカ

某自動車部品製造大手のA社の経理部長はこう言う。

「監査法人の会計士は、現場や当社の経営の実態を十分に把握せ

ず、高度な会計知識を会議室で偉そうに披露する。入退室管理を強化しろと、ジャストインタイムで1分でも出荷を急がなければならぬ工場で、トラックの出入りを細かくチェックするよう指摘された。そのために3重の門と監視カメラ、そしてそれぞれ守衛を配備しろなどと平気で言ってきた。会計に詳しく賢いのだろうが、経営実態をよく理解せず、企業規模に見合わぬ要求を押し付ける困り者だ」

この類の声は少なくない。企業側の依頼で、筆者は長年、監査に

携わる会計士の不条理と数多く対峙してきた。

そこで感じた結論のひとつが、監査法人の会計士は、知能指数は高いものの、一人の人間として見たとき、単に高尚で専門用語を振り回して指導を繰り返す「知能指数の高いバカ」がいかに多いかということだった。

この点は、拙著『監査MBA講座 監査マネジメント技法』や『経営偽装…不祥事対策への警鐘を鳴らす20の視座』などで詳細を記しているのを参照されたい。

また、全国に出店する大手小売業のB社の担当者はこう明かす。

「『先生』と呼んでおけば会計士は気を良くして、『私はこれから壁に向かって独り言をつぶやくます』と、当社が監査上で対応すべき内容や監査を通すための答えをボロボロとしゃべってくれる。お

だてておけば会計士はチョロイもんだ」

本来、独立的・客観的に対処すべき監査法人だが、会計士によっては、名譽欲をくすぐることで、監査上のグレーゾーンを駆使して監査を通せるような「裏技」を得意顔で指南してくれるという。

その厚遇が身に染み付いたように、「○○先生」と言われなければ逆に気分を損ね、ぞんざいな監査指導を行うプライドだけが高い監査人もいる。こうなると、人間としての品性を疑いたくなってしまう。クライアントのシビアな経営やその実務や現場のリアルな状況などは知ろうとせず、高尚な会計知識をこねくりまわし、会議室にこもって机上の「会計マニア」に成り下がってしまい、賢そうに見えるが実は世間知らず。しかも当人たちはそのことを全く自覚できて



いないのだ。

IFRS対応では、経営の実態に即して会計処理を行う必要があるが、このような現場を知ろうとしない監査法人の会計士に、果たしてIFRSの実効性ある対応が行えるかは大いに疑問だ。

某大手食料品企業C社を訪れたときのこと、担当者はこう明かしてくれた。

「監査法人のある会計士から、『監査を通じたかったら、私の薦めるこのIT企業に依頼して、監査法人とおたくの会社とをダイレクトに情報共有できるシステムを作れ』と言われた。結局その話を受け入れざるを得ず、3000万円かけてシステム構築を余儀なくされた。後日、同業者に聞くと、そんなことはあり得ない話だと忠告された」

公正で中立であるべき監査法人の会計士が、特定のIT企業を幹旋していたことに、筆者は少なからず驚いた。

どうもこの会計士は、幹旋先のIT企業からリベートをもらっている可能性が高い。

## 経験乏しい新人会計士にベテラン同士の主張合戦

同じ大手監査法人でも、腕利きの会計士は、より規模の大きい企業の集中する東京・名古屋・大阪を担当するため、地方の企業には、2軍・3軍の会計士が回ってくることが多い。地方企業を担当する「トンデモ会計士」は、監査法人というブランド力や監査を通す権限を、甘い汁を吸う道具として活用するのだ。昨年11月に証券取引委員会が摘発した愛知県の公認会計士は、業務上知った名古屋市の婦人服販売会社株でインサイダー取引を行い、所属していた中堅監査法人を懲戒解雇されたが、こうした事件が表面化するたびに監査不信が深刻化する。

某上場製造業のD社の担当部長は毎年同じ悩みで頭を抱える。「当社にやってくる会計士は、毎年新人が担当することになっていくのか、総じて監査実務に詳しくない。原価計算の実務をこちらが教えたということもあった。毎年、同じようなことが繰り返されるの

だが、当社は監査法人の新人研修機関ではない。いい加減にしてほしい」

では、ベテラン監査人ならば良いかと言え、そうでもない。某新興市場上場IT企業のE社の担当者はこう嘆いている。

「監査を通すために指摘されたままに対応していたら、同じ監査法人の別の監査人に『なんでこんなことをしているのか。私の言うようにしないと監査は通らない』と、180度異なる指摘をされた。ベテラン監査人同士の持論の主張合戦で現場は大混乱してしまった」

同じ理由で、ついに怒りが爆発したのは、某上場ゼネコン企業のF社の担当者だ。

「てめえらの監査法人内でもバラバラな対応しかできないなら、イチイチもつもらしい監査指摘を出さず、黙って太鼓判だけ押して帰ってくれ！」と憤慨する。

これらは筆者が耳にした会計士に対する企業担当者の不満の一例だ。これ以外にも、書ききれぬほど怒れる生の声が筆者に寄せられている。某上場化粧品企業のG社の担当部長はこう嘆く。

「監査の高度化を勧められ、監査基準や監査論を仰々しく指導されたが、現場の監査は、机上の監査論や監査基準などだけでは機能しない。言う通りにしていたら、現場を混乱させてしまい絶対うまくいかない」

監査とは、企業が健全に儲け続けられる仕組みとして機能すべきだが、監査法人の提供する監査指導の中には、監査を行えば行うほど企業経営を悪化させる「監査の逆機能」があることも事実だ。

監査の実効性向上に向けて、現場目線で経営の実態を踏まえた、身の丈に合うバランス感ある監査対応が今、求められている。

